

時雨西行

長唄

詞章

〔一部省略〕

西行物

能「江口」に取材

〔ウタイ〕 行衛さだめぬ雲水の、諸共によし雨に行く

〔本調子〕 西行法師、師を家を出でて一祈り不住の桜、法の身も吉野の花や更科の月も、心一ツ文字の歌修行めぐる旅路も長月の時も折しも時雨

都を跡小時、淀の川船行末を、鵜殿の芦のほのぼのと、松の煙の波寄する江口の里の妻子を捨てし迷ひの色を捨てかね時雨の宿を忍びかね、賤の軒端に立寄りて一ト夜の宿りをこひければ、あはれと言へど遊女が情なきさの断り

小舟漂ふ捨小舟何処へ取り付く島もなく、世の中を厭ふまでこそかたからめ、仮の宿りを惜しむ君かな

〔なう〕 口ずさみて行きさぐるを、なう暫しと呼び留め、世を厭ふ人とし聞けば仮の宿りに心留むなと思ふばかり

心澄むなと思ふぞかり、それ厭はずばこそ此方へと、天はれしく宿頼む一樹の蔭の雨やどり、此の里の一河の流れの果てはこの里に、お泊りすも

時鳥も泣くかな、問はれて包むよしもなく、昔々を語るなり

平太宗清が九代の後裔、佐藤兵衛尉憲清とて、鳥羽の帝の北面たりしが、飛花落葉の世を観じて弓矢を捨て、墨染に身を染めなして法の旅

〔二上り〕 アラ羨ましや我が身の上父母さへも白浪の、寄する岸辺の川舟を棹枕せし果敢なきに、逢瀬の波も春の頃に花咲いて色なす山の粧ひ

秋もゆふべの風に誘はれて紅葉散らして月によせ雲によせ空ひくる、人も川竹の浮き沈み契りも縁もいつしかか、人を更なり心無き草木も哀れあるものを

〔或る〕 時を頓着の思ひ或る時も浅からぬ身の或る時を昔の声を上げ愛執の迷ひと涙

是は凡人ならじと眼を閉ぢて心を静め見れば不思議や、今ぞや遊女の姿たちまち普賢菩薩と頭はれ給ひ、慈悲愛憐の大海、塵六浴の風を吹かねども

随縁真如の波の立たぬ日もなし、眼を開けば遊女と人を心を留めざれば、つらき浮世も色もなく人も慕はで待ちもせず、又別れ路も嵐吹く花よ紅葉よ月雪のふりふる事アラ

眼を閉ぢければ菩薩にて、異香の薫じ糸竹の調べ、六牙の象に打乗りて雲の内に虚空を摩まれ給ふぞ有難き

〔光明〕 光明四方に輝きて拝まれ給ふぞ有難き、行法師が生身の普賢菩薩を拝みたる、江口の里の雨宿り、空も時雨の後の世を写して謳ふ一ト節